

向日市埋蔵文化財調査報告書 第125集

物集女城跡総合調査報告書



2023

向日市教育委員会
公益財団法人向日市埋蔵文化財センター

向日市埋蔵文化財調査報告書 第125集

物集女城跡総合調査報告書

2023

向日市教育委員会
公益財団法人向日市埋蔵文化財センター



(1) 物集女城跡周辺景観（北から、「西岡」・三川合流を望む）



(2) 物集女城跡遠景（東から、平成 30 年撮影）



物集女城跡全景空撮写真（南から、平成30年撮影）



(1) 第11次調査 北土塁 (南東から)



(2) 第11次調査 北土塁 (東から)



(1) 第 11 次調査 北東土塁 (南西から)



(2) 第 10 次調査 内郭北東部全景 (北から)



(1) 第10次調査 区画施設S X 1003 (南から)



(2) 第10次調査 土坑S K 1001 (西から)



(1) 第10次調査 土坑S K 1011 (北東から)



(2) 第10次調査 土坑S K 1006 (北西から)



(1) 物集女城跡内郭出土の土師器皿



(2) 物集女城跡内郭出土の土器・陶磁器類



長野山見分絵図（明和8（1771）年 128.4 × 147.6cm 中村光枝家文書）

江戸時代中期に、当時は長野山と呼ばれた物集女西部の向日丘陵を開発する計画が持ち上がった時に作られた絵図。赤線で示された道のなかで、特に太く強調されるのが「愛宕道」や「伏見道」「京道」の幹線道路。同じ道が反対方向に行くと「山崎道」や「丹波道」となり、江戸時代の道が行き先の名前で呼ばれていたことがよくわかる。村の北西をかすめるように通る「順礼道」や、南方で山を越える「上里村道」も記されている。村内の寺社のうち永正寺・御霊社・光勝寺・崇恩寺・夷社と昌運庵墓地だけが描かれているが、これはこの絵図の主題である長野山に境内山を持っている関係寺社のみをあらわしたためである。絵図の隅に「分見百間五寸之積り」とあり、約1,200分の1の縮尺で描かれていることがわかる。東側の水田部分は省略されるが、物集女の全体のようなすがわかもっとも古い絵図。向日丘陵の部分は、現代の地図と比べても、谷筋など特に精度高く描かれている。丹波道沿いに、「山神」と記された大きな木も見える。

長野山を開発する申請が出された時、山で刈り採る柴や草を田畑の肥料や生活の燃料にして暮らしてきた物集女村の人々は開発の中止を願い出る。京都代官小堀氏の吟味のため作成されたこの絵図は、山のなかの溜め池も正確に表現されており、水田耕作に不可欠な用水涵養のためにも「山は有る姿のままに」との村人の願いをみることができる。

序

物集女城跡は、天正三（1575）年に勝龍寺城で細川藤孝によって謀殺された物集女疎入の居城でありました。物集女氏は天龍寺領物集女庄の代官として頭角をあらわし、細川・三好両氏と被官関係を結んで社会的身分を得て、山城国乙訓郡「西岡」地域の有力土豪たちの連帯組織である「国」の衆に連なり、乙訓地域の権益と自治を守るために大きな役割を果たしています。

向日市では物集女城跡を地域の歴史を語る上で欠かすことのできない重要な歴史遺産として位置づけています。この城跡の中心部はほぼ完存し、現在も土塁や堀の一部が残され、往時の姿を良好にとどめています。この遺跡を将来へ継承すべく、保存と活用の方法を探るため発掘調査をおこない、遺跡の歴史的特性を明らかにし、史跡指定へむけた課題の整理を進めてきました。

物集女城跡の発掘調査は、昭和 56（1981）年の測量調査をあわせて 11 次におよびます。また、外縁部については、中海道遺跡の調査として 9 次を重ねています。これまでに得られた成果から、一辺約 75 m 四方の主郭部を中心に西側にも城域を広げる配置構造をとることが判明しました。現存する堀と土塁の景観をあわせて、「西岡衆」が築いた乙訓地域の中世城館の典型例として注目を集めています。

このたび、向日市が市制 50 周年を迎え、物集女城跡の史跡指定を目指して、今後の保存方法や活用のあり方を検討するための基本資料として、総合調査報告書を作成することにいたしました。

本書の刊行を通じて、物集女城跡がわが国の歴史を考える上で不可欠で重要な歴史的価値をもつことが明確になりました。

本書の作成にあたり、ご指導をいただきました文化庁および京都市教育委員会、ならびに多くの助言・協力者、ご寄稿をいただいた各分野の研究者の方々、物集女城を考える会、地権者、関係各位に厚く御礼申しあげます。

令和 5 年（2023）年 3 月

向日市教育委員会

公益財団法人向日市埋蔵文化財センター

例 言

1. 本冊は、京都府向日市物集女町中条に所在する物集女城跡の総合調査報告書である。
2. 本冊は、向日市が市制 50 周年記念事業として、『物集女城跡総合調査報告書』の刊行を計画し、市費を得て業務を公益財団法人向日市埋蔵文化財センターに委託して作成したものである。
3. 本冊はに掲載する第 2 章、第 3 章第 1 節、第 4 章、第 5 章については、『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 113 集をもとに改めて作成をおこなった。第 1 章、第 3 章第 2 節、第 6～8 章は新稿である。
4. 本冊作成および発掘調査にあたり、次の方々よりご指導をいただいた（所属は当時）。
山下信一郎 禰宜田佳男 浅野啓介 近江俊秀（文化庁文化財調査官）
石崎善久 藤井整 奈良康正 中居和士（京都府教育庁指導部文化財保護課）
脇田修（大阪大学名誉教授） 広瀬和雄（国立歴史民俗博物館名誉教授）
中井均（滋賀県立大学人間文化学部教授） 山村亜希（京都大学大学院人間・環境学研究科准教授）
植村善博（仏教大学名誉教授） 杉原和雄（元大阪国際大学教授・当センター理事長）
5. 本冊作成および発掘調査にあたり、地権者ならびに関係機関・団体からご協力を賜った。
田中英男 田中嘉久 中村佳枝 中山芳澄 廣田光雄 安田茂 安田稔 山田治 山田俊男
物集女町自治連合会、物集女農家組合、物集女財産区管理会、物集女城を考える会
6. 現地調査の成果ならびに遺物の評価をおこなうのにあたり、次の方々からご教示をいただいた。
國下多美樹 小森俊寛 杉原和恵 中村武生 引原茂治 百瀬正恒
7. 本冊の作成にあたり、次の方々からご寄稿を賜り、第 6 章考古学的・歴史学的分析に収録した。
中井均、山村亜希、仁木宏（大阪公立大学大学院教授）、馬瀬智光（京都市文化市民局文化財保護課）、
福島克彦（大山崎町歴史資料館）
8. 本冊掲載の挿図に記した国土座標値は世界測地系である。参考に日本測地系の値を括弧内に記した。
9. 本冊作成にあたり、出土遺物の集合写真は公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所および楠華堂に委託し、村井伸也氏、内田真紀子氏の協力を得た。
10. 本冊作成に関わる事務・調整は、向日市教育委員会文化財調査事務所長渡辺博、公益財団法人向日市埋蔵文化財センター事務局長梅本康広、次長兼総務係長高林美香があたった。
11. 本冊の執筆は、渡辺博、梅本康広、向日市文化資料館長玉城玲子、向日市教育委員会主任小田裕子（当時）、公益財団法人向日市埋蔵文化財センター調査・普及係長中島信親、同係主任中塚良（当時）、主査田原葉月が執筆した。分担は目次に示すとおりである。
12. 本冊の編集は、梅本康広、中島信親が担当した。

目 次

巻頭図版

序

例 言

第1章	調査の経緯	渡辺 博	1
第2章	物集女城跡の位置と自然・地形環境	中塚 良	11
第3章	物集女城跡の歴史環境		
1	歴史環境	梅本康広	21
2	周辺の文化財	玉城玲子	33
第4章	文献からみた物集女城	小田裕子	45
第5章	物集女城跡の発掘調査成果		
1	既往の調査	中島信親	57
2	遺 構	中島信親	60
	〔1〕堀		
	(1) 東堀		60
	(2) 東堀－北堀接合部		64
	(3) 北堀		64
	〔2〕土塁		
	(1) 東土塁		64
	(2) 南土塁		66
	(3) 西土塁		68
	(4) 北土塁		68
	(5) 北東土塁		68
	〔3〕内郭		72
	〔4〕城外縁部		
	(1) 「西外郭」		78
	(2) 「北外郭」		80
	(3) 北西部		82
	(4) 東部		82
3	遺 物	田原葉月	82
	〔1〕土師器・皿		82
	〔2〕陶磁器類・瓦質土器		93

第6章	考古学的・歴史学的分析	
1	物集女城跡の歴史的意義	中井 均 109
2	戦国社会と物集女城跡	仁木 宏 125
3	地図から読む戦国西岡の城館－桂川用水と物集女城－	山村亜希 139
4	石見城の調査成果と歴史的評価	馬瀬智光 153
5	物集女城調査の成果と課題	福島克彦 169
第7章	物集女城跡の保存と活用	渡辺 博 179
第8章	総括	中島信親 189

付載 戦国時代の物集女と乙訓・西岡（向日市文化資料館令和元年度企画展図録）

図版

抄録

巻頭図版目次

- 巻頭図版第1 (1) 物集女城跡周辺景観(北から、三川合流を望む)
(2) 物集女城跡遠景(東から、平成30年撮影)
- 巻頭図版第2 物集女城跡全景空撮写真(南から、平成30年撮影)
- 巻頭図版第3 (1) 第11次調査 北土塁(南東から)
(2) 第11次調査 北土塁(東から)
- 巻頭図版第4 (1) 第11次調査 北東土塁(南西から)
(2) 第10次調査 内郭北東部全景(北から)
- 巻頭図版第5 (1) 第10次調査 区画施設S X 1003(南から)
(2) 第10次調査 土坑S K 1001(西から)
- 巻頭図版第6 (1) 第10次調査 土坑S K 1011(北東から)
(2) 第10次調査 土坑S K 1006(北西から)
- 巻頭図版第7 (1) 物集女城跡内郭出土の土師器皿
(2) 物集女城跡内郭出土の土器・陶磁器類
- 巻頭図版第8 長野山見分絵図

図版目次

- 図版第1 (1) 全景空撮写真-1(南から、平成2年撮影)
(2) 全景空撮写真-2(南から、平成17年撮影)
- 図版第2 (1) 調査地遠景-1(南西から、平成10年撮影)
(2) 調査地遠景-2(南西から、平成31年撮影)
- 図版第3 (1) 第3次調査 東土塁・東堀(南東から)
(2) 第2次調査 東堀(北から)
- 図版第4 (1) 第2次調査 北堀(東から)
(2) 第3次調査 北堀(西から)
- 図版第5 (1) 第2次調査 東堀東堤部(南から)
(2) 第2次調査 北堀北堤部(東から)
- 図版第6 (1) 第2次調査 東堀北東部2-1トレンチ(北から)
(2) 第2次調査 東堀北東部2-1トレンチ(南から)
- 図版第7 (1) 第2次調査 東堀中央部2-2トレンチ(東から)
(2) 第2次調査 東堀中央部2-2トレンチ(北から)
- 図版第8 (1) 第2次調査 東堀中央部2-3トレンチ(東から)

- (2) 第2次調査 東堀中央部2-3トレンチ土塁下部(東から)
- 図版第9 (1) 第3次調査 北堀3-1トレンチ(南東から)
(2) 第3次調査 東堀北東部3-2トレンチ(南から)
- 図版第10 (1) 第3次調査 東堀北東部3-2トレンチ(北東から)
(2) 第3次調査 東堀南部3-3トレンチ(東から)
- 図版第11 (1) 第4次調査 東土塁-1(南から)
(2) 第4次調査 東土塁-2(南から)
- 図版第12 (1) 第4次調査 東土塁基底部(南西から)
(2) 第4次調査 土塁南東隅部(北から)
- 図版第13 (1) 第6次調査 南土塁(北から)
(2) 第5次調査 土塁南西隅部-1(西から)
- 図版第14 (1) 第5次調査 土塁南西隅部-2(東から)
(2) 第5次調査 土塁南西隅部-3(南東から)
- 図版第15 (1) 第5次調査 南土塁・南堀(西から)
(2) 第5次調査 西土塁・西堀(南西から)
- 図版第16 (1) 第11次調査 北土塁断面-1(東から)
(2) 第11次調査 北土塁断面-2(南から)
- 図版第17 (1) 第11次調査 北東土塁-1(南東から)
(2) 第11次調査 北東土塁-2(北西から)
- 図版第18 (1) 第10次調査北半(東から)
(2) 第10次調査北西部(東から)
- 図版第19 (1) 第10次調査南半(東から)
(2) 第10次調査南西部(東から)
- 図版第20 (1) 第10次調査 土坑S K 1010(北から)
(2) 第10次調査 土坑S K 1001(西から)
- 図版第21 (1) 第10次調査 礎石をもつピット(西から)
(2) 第4次調査 土坑S K 0405(北東から)
- 図版第22 (1) 第11次調査全景(南から)
(2) 第11次調査西半(東から)
- 図版第23 (1) 第7次調査全景(北から)
(2) 第7次調査 柵S A 0710(北から)
- 図版第24 (1) 第8次調査第2トレンチ全景(西から)
(2) 第8次調査第2トレンチ全景(東から)
- 図版第25 (1) 中海道遺跡第38次調査全景(北から)
(2) 中海道遺跡第40次調査全景(西から)
- 図版第26 (1) 中海道遺跡第38次調査 溝S D 3807(北から)

- (2) 中海道遺跡 38 次調査 ピット P 31 (北から)
- 図版第27 (1) 第9次調査第1トレンチ全景 (南から)
(2) 第9次調査第1トレンチ 溝 S D 0901・柵 S A 0907 (北東から)
- 図版第28 (1) 中海道遺跡第37次調査 溝 S D 0704・石組 S X 0721 (東から)
(2) 中海道遺跡第37次調査 溝 S D 0704・石組 S X 0721 (西から)
- 図版第29 (1) 中海道遺跡第21次調査全景 (南東から)
(2) 中海道遺跡第21次調査全景 (南西から)
- 図版第30 (1) 中海道遺跡第73次調査全景 (南東から)
(2) 中海道遺跡第73次調査全景 (南西から)
- 図版第31 (1) 物集女城跡周辺出土遺物 - 1 (中海道遺跡第1次)
(2) 物集女城跡周辺出土遺物 - 2 (中海道遺跡第32次)
- 図版第32 (1) 物集女城跡周辺出土遺物 - 3 (中海道遺跡第19・32次)
(2) 物集女城跡周辺出土遺物 - 4 (中海道遺跡第3・21・73次)
- 図版第33 (1) 物集女城跡周辺出土遺物 - 5 (中海道遺跡第73次・芝ヶ本遺跡第1次)
(2) 物集女城跡周辺出土遺物 - 6 (南条古墳第3次)
- 図版第34 物集女城跡周辺出土遺物 - 7 (物集女車塚古墳第3次)
- 図版第35 物集女城跡周辺出土遺物 - 8 (物集女車塚古墳第3次)
- 図版第36 物集女城跡周辺出土遺物 - 9 (物集女車塚古墳第3次)
- 図版第37 物集女城跡周辺出土遺物 - 10 (物集女車塚古墳第3次)
- 図版第38 (1) 物集女城跡周辺出土遺物 - 11 (物集女車塚古墳第3次)
(2) 物集女城跡周辺出土遺物 - 12 (物集女車塚古墳第2次・物集女車塚周辺遺跡第8次)
- 図版第39 (1) 物集女城跡周辺出土遺物 - 13 (物集女車塚古墳第2次)
(2) 物集女城跡周辺出土遺物 - 14 (中海道遺跡第29次)
- 図版第40 (1) 物集女城跡出土遺物 - 1
(2) 物集女城跡出土遺物 - 2

挿 図 目 次

第1図	物集女城公園（北西から）	1
第2図	物集女城公園内の大型案内板（西から）	1
第3図	物集女城跡に西接して整備された「物集女城公園」（西上空から、令和4年7月撮影）	1
第4図	土塁に向かい設置した小型案内板	2
第5図	物集女城跡測量図（向日市史上巻 図139から）	2
第6図	測量成果から描いた物集女城跡の復原図	3
第7図	「城の池」に設置した案内板	3
第8図	墳丘の崩落が進んだ状態（南東から）	4
第9図	前方部保護盛土の状態（北から）	4
第10図	倒木以前の土塁上の大木（南西から）	6
第11図	物集女城跡活用計画図（案）〔平成30（2018）年度作成〕	7
第12図	物集女城跡 保存整備計画（案）鳥瞰図〔平成30（2018）年度作成〕	8
第13図	物集女城跡 保存整備計画（案）模型〔平成30（2018）年度作成〕	9
第14図	物集女城跡周辺地形現況平面図〔平成30（2018）年度測量〕	10
第15図	京都盆地北部中世城館遺跡分布図・地形条件図	12・13
第16図	物集女村地籍図と物集女城	17
第17図	中海道遺跡の範囲と既往の調査地点	22・23
第18図	光勝寺・元弘寺の位置と周辺の成果	28
第19図	元弘寺の創建瓦	30
第20図	1922（大正11）年の物集女	34
第21図	来迎寺の文化財	36
第22図	昌運寺・永正寺の文化財	38
第23図	物集女城跡周辺の石仏群	40
第24図	長野山見分絵図 解読図	42
第25図	物集女地区の水利	43
第26図	向日神社本殿棟札5枚（国重要文化財・左）・同応永29年（慶長2年の写・右）	46
第27図	「西岡」とその周辺	47
第28図	周辺調査地配置図	59
第29図	堀－1（トレンチ配置図・第2－1トレンチ実測図）	61
第30図	堀－2（第2－3トレンチ実測図）	62
第31図	堀－3（第3－1・2トレンチ実測図）	63
第32図	土塁－1（第4次調査平面図）	65
第33図	土塁－2（東土塁断面図・土塁－堀断面模式図）	66

第34図	土塁－3（南土塁調査区配置図）	67
第35図	土塁－4（第5次調査平面図）	69
第36図	土塁－5（北土塁S X 1100 実測図）	70
第37図	土塁－6（北東土塁S X 1101 他実測図）	71
第38図	内郭－1（東半平面図）	73
第39図	内郭－2（区画施設S X 1003 実測図）	74
第40図	内郭－3（土坑S K 1006 実測図）	75
第41図	内郭－4（土坑S K 1001・10・15、落ち込みS X 1016 実測図）	76
第42図	内郭－5（土坑S K 1011 実測図）	77
第43図	外縁部－1（「西外郭」平面図）	79
第44図	外縁部－2（「北外郭」平面図）	81
第45図	物集女城跡および中海道遺跡 年代別出土点数	83
第46図	遺物実測図－1（内郭 遺構出土）	84
第47図	遺物実測図－2（内郭 包含層出土）	85
第48図	遺物実測図－3（北堀・東堀・「北外郭」）	86
第49図	遺物実測図－4（「西外郭」－1）	87
第50図	遺物実測図－5（「西外郭」－2）	88
第51図	遺物実測図－6（「西外郭」－3）	89
第52図	遺物実測図－7（中海道遺跡 北部・南部）	90
第53図	遺物実測図－8（中海道遺跡 西部）	91
第54図	遺物実測図－9（内郭1）	94
第55図	遺物実測図－10（内郭2）	95
第56図	遺物実測図－11（堀・土塁・「北外郭」）	96
第57図	遺物実測図－12（「西外郭」）	97
第58図	物集女城跡 地区別出土品内訳	98
第59図	遺物実測図－13（中海道遺跡）	100
第60図	遺物実測図－14（上植野城跡）	101
第61図	物集女城跡・中海道遺跡・上植野城跡 出土品内訳	102
第62図	物集女城跡・中海道遺跡・上植野城跡 出土品比率	103
第63図	物集女城跡平面図	110
第64図	薬王山光勝寺略縁起	111
第65図	乙訓地域の中世城館位置図	112
第66図	石見城跡測量図	113
第67図	開田城跡平面図	114
第68図	大内城跡の立地と遺構変遷図	116
第69図	甲賀郡和田谷の城館跡分布図	118

第70図	菊永氏館跡平面図	119
第71図	北村城跡縄張り図	121
第72図	北脇城跡概要図	122
第73図	空港跡地遺跡遺構平面図	123
第74図	桂川右岸平野の水系・街道と中世城館	140
第75図	物集女村の地形と水利	142
第76図	向日丘陵以西の街道と中世城館	147
第77図	物集女村の集落と道	148
第78図	京都盆地南部の城郭位置図	154
第79図	石見城跡付近の赤色レーザー測量図	156
第80図	石見城跡付近等高線図	157
第81図	石見城 2021 年調査区（西から：LiDAR 測量）	158
第82図	石見城 2022 年 - 2 区（東から：LiDAR 測量）	158
第83図	石見城 2022 年 - 3 区（北西から：LiDAR 測量）	158
第84図	南春日下西代遺跡	159
第85図	上久世城跡	159
第86図	久我東町遺跡	160
第87図	革島館跡	161
第88図	羽束師菱川城跡	163
第89図	物集女城跡周辺地籍図トレース（京都地方法務局所蔵を参考）	175
第90図	平成 25 年度史跡見学会 和歌山城にて	182
第91図	平成 30 年度史跡見学会 富松城跡にて	182
第92図	設立 10 周年記念講演会（脇田修氏）	185
第93図	設立 20 周年記念コンサート	185
第94図	設立 20 周年記念事業チラシ	185
第95図	物集女城跡の保護を必要とする範囲及び整備計画、活用図（案）	187
第96図	向日市文化財保存活用計画案（模式図）	187
第97図	向日市文化財保存活用計画図案	188
第98図	物集女城内郭復原図	191
第99図	物集女城とその周辺	193
付図 1	物集女城跡周辺地形段彩図	
付図 2	物集女城跡地形段彩図	
付図 3	物集女城跡詳細地形赤色立体地図	
付図 4	物集女城跡詳細地形測量図	
付図 5	物集女城跡オルソ画像	

表 目 次

表-1	中海道遺跡調査一覧	24～26
表-2	史料にみられる「物集女」関連の出来事について	54・55
表-3	物集女城跡調査一覧	58
表-4	中海道遺跡調査一覧（物集女町中条実施分）	60
表-5	『天龍寺文書』算用状等による物集女関連記事	172
表-6	物集女城を考える会見学会一覧表	183
表-7	物集女城を考える会講演会一覧表	184

図 出 典

- 第 17 図 松崎俊郎 作成・提供
第 18 図 向報 71 集第 90 図を一部改変。
第 19 図 (1～5) 向報 43 集 中海道遺跡第 29 次
第 29 図 向報 63 集第 65 図 (a) を一部改変。
第 30 図 向報 60 集第 103 図 (b)・105 図を合成、一部改変。
第 31 図 向報 60 集第 107 図を一部改変。
第 32 図 向報 60 集第 112・113 集を合成、一部改変。
第 33 図 向報 46 集第 104 図を一部改変。
第 34 図 向報 46 集第 102・107・108 図を合成、一部改変。
第 35 図 向報 49 集第 84 図・向報 52 集第 118 図を合成、一部改変。
第 36 図 向報 49 集第 82 図を一部改変。
第 37 図 向報 112 集第 73 図を一部改変。
第 38 図 向報 112 集第 74 図を一部改変。
第 39 図 向報 46 集第 101・104 図、向報 108 集第 65 図、向報 112 集第 72 図を合成、一部改変。
第 40 図 向報 108 集第 66 図を一部改変。
第 41 図 向報 108 集第 67 図を一部改変。
第 42 図 向報 108 集第 68 図を一部改変。
第 43 図 向報 108 集第 69 図を一部改変。
第 44 図 向報 44 集第 127 図、向報 59 集第 95・108 図 (a)、向報 60 集第 153 図 (a) を合成、一部改変。
第 45 図 向報 60 集第 43・44・60 図 (a)、都城 29、43 頁を合成、一部改変。
第 46 図 (1～9・15～70) 向報 108 集 物集女城跡第 10 次
(10～14) 向報 112 集 物集女城跡第 11 次
第 47 図 (71～74・88・93・94・101～106・111・112・126・132・138) 向報 108 集 物集女城跡第 10 次
(75～87・89～92・95～100・107～110・113～125・127～131・133～137・139～147) 向報 112 集 物集女城跡第 11 次
第 48 図 (159) 向報 60 集 中海道遺跡第 33 次
(161) 向報 60 集 物集女城跡第 2・3 次
(157・158・160・162～165) 向報 46 集 物集女城跡第 4 次
(148～156) 向報 60 集 中海道遺跡第 21 次
(166～168) 向報 60 集 中海道遺跡第 18 次
(169～174) 向報 44 集 中海道遺跡第 37 次
第 49 図 (175～187) 向報 59 集 物集女城跡第 7 次
(188～217) 向報 44 集 中海道遺跡第 38・39 次
第 50 図 (218～229・232・237・238・244～247・249～256) 向報 60 集 物集女城跡第 8 次
(230・236・240・248) 向報 49 集 物集女城跡第 5 次
(231・239・241～243) 向報 44 集 中海道遺跡第 38・39 次
(233・234) 向報 59 集 物集女城跡第 7 次
第 51 図 (260・272) 向報 59 集 物集女城跡第 7 次
(261・263・268・269・271・278・284～291) 向報 44 集 中海道遺跡第 38・39 次
(257～259・262・264～267・270・273～277・280・281) 向報 60 集 物集女城跡第 8 次
(279) 向報 49 集 物集女城跡第 5 次
第 52 図 (303) 向報 53 集 中海道遺跡第 25 次
(292・301・302) 府概 70 冊 中海道遺跡第 34 次
(293～300) 府概 77 冊 中海道遺跡第 42 次
(306・307) 向報 71 集 中海道遺跡第 51 次
(304・305・308・309) 向報 60 集 中海道遺跡第 56 次
(310～312・329) 向報 60 集 中海道遺跡第 23 次
(325・326) 向報 60 集 中海道遺跡第 35 次
(327) 向報 60 集 中海道遺跡第 58 次
(313～324) 向報 104 集 中海道遺跡第 70 次
(328) 向報 43 集 中海道遺跡第 29 次
第 53 図 (343～346) 向報 3 集 中海道遺跡第 1 次
(335・339～341・347・348・358・359・374～376) 京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和 57 年度
(342) 向報 75 集 中海道遺跡第 15 次
(330・331) 向報 60 集 中海道遺跡第 19 次
(349・352) 向報 43 集 中海道遺跡第 27 次
(336～338・353～357・360・362～364・368・369) 向報 60 集 中海道遺跡第 30 次
(332～334) 府概 81 冊 中海道遺跡第 46 次
(350・351・361・365・367・373) 向報 72 集 中海道遺跡第 64 次
(366・370～372) 向報 83 集 中海道遺跡第 67 次
第 54 図 (1～12) 向報 108 集 物集女城跡第 10 次
第 55 図 (13～21) 向報 112 集 物集女城跡第 11 次
第 56 図 (22～30) 向報 60 集 物集女城跡第 2・3 次

- (31～34) 向報 46 集 物集女城跡第 4 次
 (35) 向報 44 集 中海道遺跡第 37 次
 第 57 図 (36～38・41) 向報 59 集 物集女城跡第 7 次
 (39・45) 向報 60 集 物集女城跡第 8 次
 (40・42～44) 向報 63 集 物集女城跡第 9 次
 第 59 図 (56) 向報 60 集 中海道遺跡第 18 次
 (50) 向報 60 集 中海道遺跡第 21 次
 (47・51) 向報 60 集 中海道遺跡第 30 次
 (49・53) 向報 60 集 中海道遺跡第 38 次
 (62) 向報 60 集 中海道遺跡第 40 次
 (52・55) 向報 67 集 中海道遺跡第 52・54 次
 (46) 向報 71 集 中海道遺跡第 53 次
 (48・57～59・61) 向報 60 集 中海道遺跡第 56 次
 (60) 向報 60 集 中海道遺跡第 58 次
 (54・63) 向報 72 集 中海道遺跡第 64 次
 第 60 図 (64～74) 向報 103 集 長岡京跡左京第 563 次
 (75～81) 向報 102 集 向日市第 13128・14078 次詳細分布調査
 表-1 中島信親 作成・提供

凡例

向報○集：『向日市埋蔵文化財調査報告書』第○集

府概○冊：『京都府遺跡調査概報』第○冊

都城 29：『(公財)向日市埋蔵文化財センター年報 都城』29 2018 年

第1章 調査の経緯

1 物集女城跡の調査の沿革

令和4（2022）年10月1日に京都府向日市は、市制施行50周年という記念すべき年を迎えた。

数多く実施された記念事業の一つに「物集女城公園」（向日市物集女町中条23番1、652.66㎡）の整備と供用開始がある。本公園は、物集女城跡に西接して所在した市有地を都市公園として整備したものである。



第1図 物集女城公園（北西から）



第2図 物集女城公園内の大型案内板（西から）



第3図 物集女城跡に西接して整備された「物集女城公園」（西上空から、令和4年7月撮影）

数多く実施された記念事業の一つに「物集女城公園」(向日市物集女町中条 23 番 1、652.66㎡)の整備と供用開始がある。本公園は、物集女城跡に西接して所在した市有地を都市公園として整備したものである。

案内板を備えた公園の設置目的の一つは、物集女城跡の大半が私有地で立ち入りが制限されるため、同城跡の一元的に案内解説を同地で行うことである。



第 4 図 土塁に向かい設置した小型案内板

そして、将来の物集女城跡を適切に保存し、市の北の玄関口の遺跡として整備し活用を促進することを見据えたものである。

以下、本章では物集女城跡のおよび物集女地域での埋蔵文化財発掘調査に係る調査の経緯を概説する。

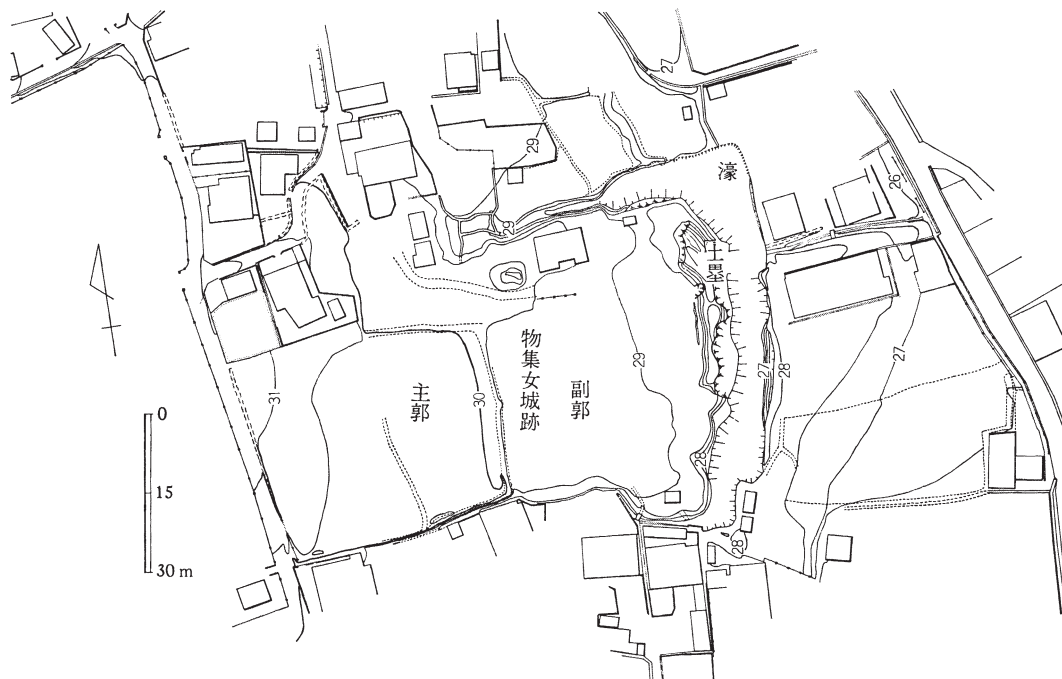
向日市の北部に所在する物集女城跡については、埋蔵文化財発掘調査開始以前から、中世に当地城域一帯を支配した国人の一つ物集女氏の本拠地として周知されていた。

長享元(1487)年に上久世庄(現京都市)公文に「郷々出銭」を申し入れた「惣国」の代表者六人の中に「物集女四郎右衛門尉光重」の署名が見られる。

この物集女氏は、恐らく幕府の西岡被官衆の一人で、応仁の乱後、惣国の結集に参加したものと考えられている。

織田信長が山城地域を鎮圧した後、天正元年(1573)細川藤孝は桂川西岸一帯の一職を与えられ国人等の領土を安堵した。

安堵を受けた国人等は、勝龍寺城の藤孝のもとにお礼に参上すべきであったが物集女氏の当主、忠重



第 5 図 物集女城跡測量図(向日市史上巻 図 139 から)

入道宗入は代々の自分の領地であり参上する謂われはないと拒絶したため、天正5（1575）年10月2日に勝龍寺城で誘殺（謀殺）され、以後、物集女城は焼失するとともに物集女氏は衰退したと伝えられてきた。

このような史料調査と比較し、現地での考古学的な調査は遅れていた。

その一因の一つに本市を代表する遺跡「長岡京跡」の埋蔵文化財発掘調査がある。

京都、大阪の大都市近郊の通勤圏に所在する本市は大小様々な開発圧力に直面し、これらの開発に伴う多くの埋蔵文化財発掘調査を実施してきた。しかし、その大半は市域の南半部に所在する長岡京跡に関するもので、比較的開発が緩やかであって市域北部の物集女城跡周辺は未調査の状態であった。

この物集女城跡の考古学的な調査の第一歩は、昭和58（1983）年3月31日発行の「向日市史上巻」への掲載を目的とした測量調査である。

この測量調査は、昭和56（1981）年9～10月に向日市教育委員会にアルバイトとして採用された松崎俊郎と渡辺博が中心となって長岡京跡の埋蔵文化財発掘調査の合間を利用し実施した。このため、測量期間2か月であるが、国土座標の設置などを含めると半年以上におよんだ。

測量の結果、物集女城は、主郭・副郭の複郭構造を取り、東西100m、南北75mの規模を有し、北東隅の一部と東辺45m分にわたり幅7～12m、高さ1.0～1.5mを測る土塁が、また東辺には幅5～10m、深さは1m以上を測る堀が確認できた。

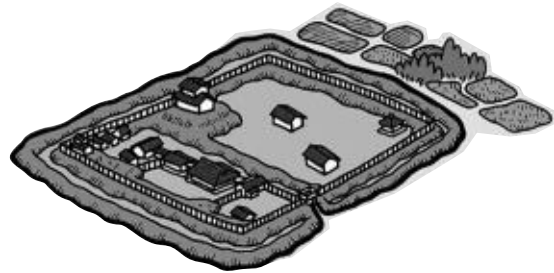
向日市史上巻に物集女城跡を掲載後、同城跡に関する現地での各種調査は休止状態となった。これは、同城跡が個人所有の畑地や竹林、地元財産区の管理する農業用水池で開発等がおよばなかったことからである。

しかし、昭和57（1982）年から、物集女城跡を含めた周辺に広がる中海道遺跡の調査を開発圧力に比例して頻繁に行うこととなる。これらの埋蔵文化財発掘調査の測量は、物集女城跡の測量時に周辺に設置した国土座標を活用して実施した。

また、昭和58（1983）年には物集女城跡の東側の堀と考えられる「城の池」に案内板を設置し、周辺住民および来訪者に周知を図った。

2 物集女車塚古墳の調査と整備

昭和58（1983）年、物集女町南端部において物集女車塚古墳の調査を開始した。前述のとおり、市域の南半部において長岡京跡の埋蔵文化財発掘調査を中心に実施してきた本市にとって開発がおよんで



第6図 測量成果から描いた物集女城跡の復原図



第7図 「城の池」に設置した案内板

いない古墳の調査は異例であった。

しかし、住宅街に所在する同古墳は昭和 51 (1976) 年に緑地指定され公園として活用されるようになり、子供たちの「草滑り」などにより徐々に墳丘が崩壊の危機に晒されるようになった。

そこで、昭和 58 (1983) 年に墳丘の規模を把握するための埋蔵文化財発掘調査を実施した後に、当時長岡京遷都 1200 年記念事業として造成工事中であった向日市立図書館、向日市文化資料館の造成土を前方部に運搬し保護盛り土とした。

同古墳は、翌昭和 59 (1984) 年には石室内埋蔵文化財発掘調査、石室内の側壁および天井石挙動調査などを実施し、平成 4 (1992) 年度から平成 6 (1994) 年度にかけての 3 か年で同古墳の整備工事を実施し、石室公開など活用を開始した。

この間、物集女城跡に関する現地での各種調査は休止状態であったが、来る物集女城跡の調査時に指針とすべく、平成 2 (1990) 年に向日市文化財保護審議会委員で本市在住の大阪大学教授の脇田修氏に物集女城跡の歴史的意義について考察を依頼した。

以下、当時の内容を原文のまま下記のとおり記載する。

H 2. 3

大阪大学文学部教授 脇田修



第 8 図 墳丘の崩落が進んだ状態 (南東から)



第 9 図 前方部保護盛り土の状態 (北から)

物集女城跡の歴史的意義

向日市の北西部にある物集女は、古い集落であるが、なかでも室町時代から戦国時代にかけて活躍した物集女氏の居城があったところとして知られる。

室町時代にはわが向日市と京都市西京区・長岡京市・大山崎町の地域に、革嶋・物集女・鶏冠井・神足などそれぞれの地域に根を張った有力者がいたが、彼らは足利将軍の直轄家臣として西岡被官人といわれる在地領主であった。これらの在地領主は戦国騒乱や豊臣時代の兵農分離政策などによって、地元

を離れた者や没落した者が多く、現在まで続いている家は革嶋氏のみであり、また当時の遺構で明確に残っているのは細川藤孝の居城であった勝龍寺城と物集女氏の物集女城のみである。

物集女氏は物集女の在地領主として栄えていた。1422年（応永29）の向日神社棟札には、物集女の住人として「源太郎左衛門入道道集 同三郎左衛門尉光清」の名があるが、これは物集女氏と思われる。1487年（長享元）の文書には鶏冠井・神足らとならんで「物集女四郎右衛門光重」が出てくるが、これは物集女氏の存在を確実に示す史料であり、15世紀から旧乙訓地方の有力武士であったことを明らかにしている。そして16世紀になると、1546年（天文15）物集女孫四郎慶照、1555（天文24）には天龍寺領であった物集女荘の年貢を扱っている物集女太郎左衛門尉同兵衛大夫久勝の名が文書に見える。このように室町時代には物集女氏は物集女城主として活躍するとともに、物集女荘の荘官をも務めたのであった。また1542年（天文11）には、物集女に新市が開かれているから、この付近の経済の中心となったことが知れる。おそらく物集女城を核として集落があり、市場が立ったのであろう。

しかし物集女氏の地位も、信長の入京によって変化することになる。1575年（天正3）物集女忠重は細川藤孝によって勝龍寺城において討たれて滅亡した。この忠重は、おそらく織田信長が尾張から入京したさいに、將軍義昭に属したとみられる。そして信長が義昭を追放したのは、信長の家臣となった。もちろん義昭も信長もこの地域を直接治めたのではなく、義昭の家臣で、のちには信長に付いた細川藤孝が勝龍寺城にいて桂川から西の地域を支配していた。そのため物集女氏なども信長の家臣であるが、戦闘などには細川藤孝の指揮下に入るようになった。このため細川藤孝は物集女氏の旧来からの領地を安堵し、彼との関係を深めようとしたのであるが、物集女忠重はお礼にもいかなかったし、細川のいうことに従わなかった。彼の気持ちでは、物集女は「代々の所領」だし、自分は「代々の領主」だから、細川に認めてもらったからといってお礼なんぞ言う必要がない、ということであつたらしい。お礼に行くのは服属することを認めたことだからである。このように自立性の強い人物をそのまま置くのは示しがつかない。そこで細川藤孝は重心の松井康之（のち家老・八代城主）らに相談して、物集女忠重を勝龍寺城に呼び寄せ、松井に米田求政（のち家老）が協力し不意打ちにした。ここで物集女氏は滅びたのである。この報告をうけた織田信長が、物集女は「曲者」だと聞いているとあって、事後承諾を与えた書簡が残っている。なぜ物集女忠重を討たれたか。中世の在地領主はその土地に根を張り自立性が強かったから、なかなか將軍や守護といった上級領主の命令を聞かなかった。信長・秀吉になると、このような領主を抑えこんで、近世社会の体制を作っていこうとする。物集女忠重はこのような時代の流れに反逆して、中世・戦国最後の領主として死んだのである。

物集女氏は滅びたが、これに従った人々は物集女村に残って、現在にいたっている。1659年（万治2）の文書に、物集女村には侍衆16人がいて、向日神社の祭礼に神役を務めるとあるから、このころでも村内では侍衆と百姓衆の別があつたのであつた。

さて現在残る中世領主の遺構としては、革嶋氏の邸宅は館であり、勝龍寺城は細川氏のように新しく入った領主のものであるから、物集女村に少なくとも15世紀から住みついていた物集女氏の居城は、旧乙訓郡でもっともまとまった中世在地領主の遺構として貴重である。ここは堀の一部などが残っており、従来から所在地が知られているが、本格的な調査はおこなわれなかった。昨年12月、物集女城跡

の北にある安田一郎氏邸を調査したが、物集女城に関する遺構とみられる土壇・溝などが発見された。とくに城の北側の区画部分と見られるものに直角に入る幅 2 メートル・深さ 60 センチの溝があることや、陶磁器・瓦器が出土していることは、物集女城の範囲・形状や時期を検討する重要な資料と考えられる。

物集女城は主廓・副廓の複廓構造を取り、東西 100 メートル・南北 5～60 メートルのかなりの規模のものが推定されているが、今回の調査によっても物集女城の遺構は推定地域の地下に残っていることは事実となり、さらに調査をおこなうことによって多くの発見があり、その埋もれた歴史を明らかにすることができると思う。幸い当該地域は建造物がほとんどなく、畑地などとして存在しているから、調査・保存には適していると思う。

向日市教育委員会は、脇田修氏の考察を指針に物集女城跡が地域の歴史を物語る貴重な遺跡であることを深く認識し、来るべき物集女城跡の調査に備えた。

3 物集女城跡の埋蔵文化財発掘調査の開始

〔1〕 範囲確認調査の開始

平成 7 (1995) 年、物集女車塚古墳の調査および整備を終了し活用を開始したことから、物集女町内に所在する物集女城跡の調査と保存、整備、活用について注目した。

この背景には、同町域内で物集女城跡の北側約 100 m の箇所ですべて同時期に実施されていた府道中山稲荷



第 10 図 倒木以前の土塁上の大木 (西から)

線の道路拡幅工事などで地元協議が行われる中で「物集女城跡の保存と整備」が地域の要望として取り上げられたことである。

第8章物集女城跡の保存と活用で後述する「物集女城を考える会」の活動もその一つである。

向日市教育委員会では、平成7（1995）年から物集女城の規模と性格を把握するため、年度計画で埋蔵文化財発掘調査を実施することとした。調査区は、土塁や堀を中心に、土地所有者の理解が得られた箇所から実施することとした。

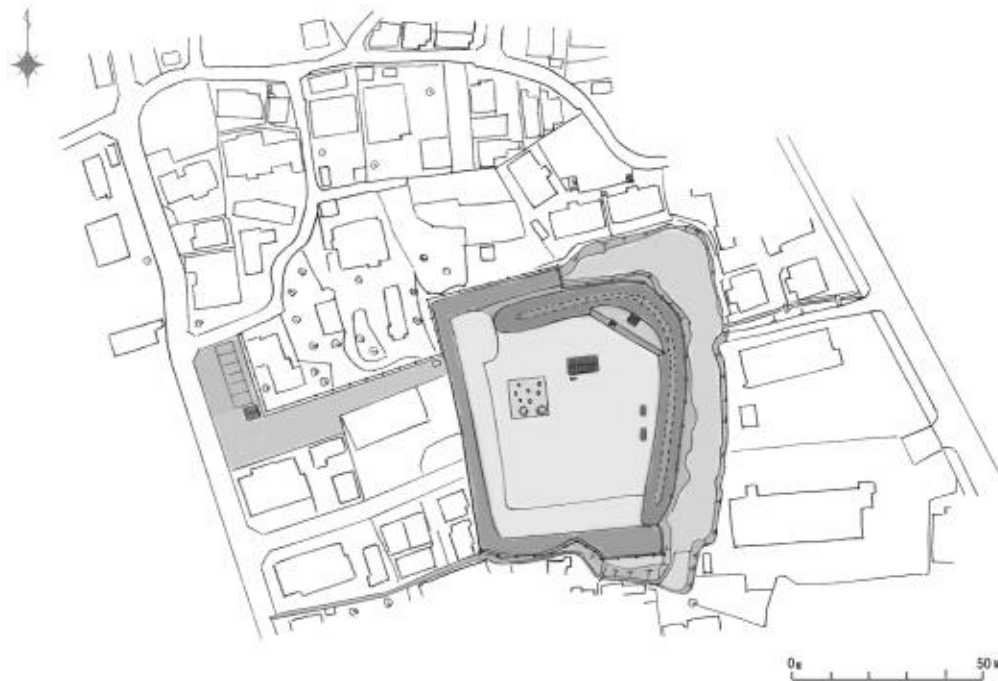
物集女城跡の埋蔵文化財発掘調査成果については、第5章で記載のとおりであるが、平成7（1995）年から毎年、計画的に実施してきた埋蔵文化財発掘調査を平成14（2002）年に中断する事態となった（開発に伴う原因者負担金調査を除く）。

平成14（2002）年に本市を含めた京都の広範囲に災害をもたらした台風により、次回の埋蔵文化財発掘調査地として計画していた物集女城跡の北西隅部の土塁に所在した大木が折れ、隣接して立つ家屋が全壊した。

土地所有者および地元周辺住民への配慮から、物集女城跡の計画的埋蔵文化財発掘調査を中断することとした。

物集女城跡の計画的埋蔵文化財発掘調査を中断した向日市教育委員会は、以前から継続的に実施してきた向日丘陵上に所在する五塚原古墳、元稲荷古墳、寺戸大塚古墳、南条古墳、物集女車塚古墳の5基の古墳の史跡指定に向け各種の事業を集中して実施した。

この結果、平成27（2015）年3月10日に寺戸大塚古墳が史跡指定を受け、翌平成28（2016）年3月



第11図 物集女城跡活用計画図（案）〔平成30（2018）年度作成〕

1 日には寺戸大塚古墳を含んだ向日市域の 5 基の古墳のほか、近隣市町の 8 基の計 13 基の古墳が「乙訓古墳群」として史跡指定を受けた。

向日市は、令和元（2019）年度に五塚原古墳および寺戸大塚古墳の民有地 32,527.89 平方メートルの公有化を図り、今後、整備活用に取り組むこととした。

〔2〕主郭内の中心とした範囲確認調査の再開

向日丘陵上の 5 基の古墳の史跡指定を受けた平成 28（2016）年、物集女城跡の保存と活用について地元物集女区を中心に気運が高まったことを受け、主郭内の埋蔵文化財発掘調査を 2 年計画で実施し、これまでの物集女城跡の埋蔵文化財発掘調査成果をとりまとめた報告書を刊行した。

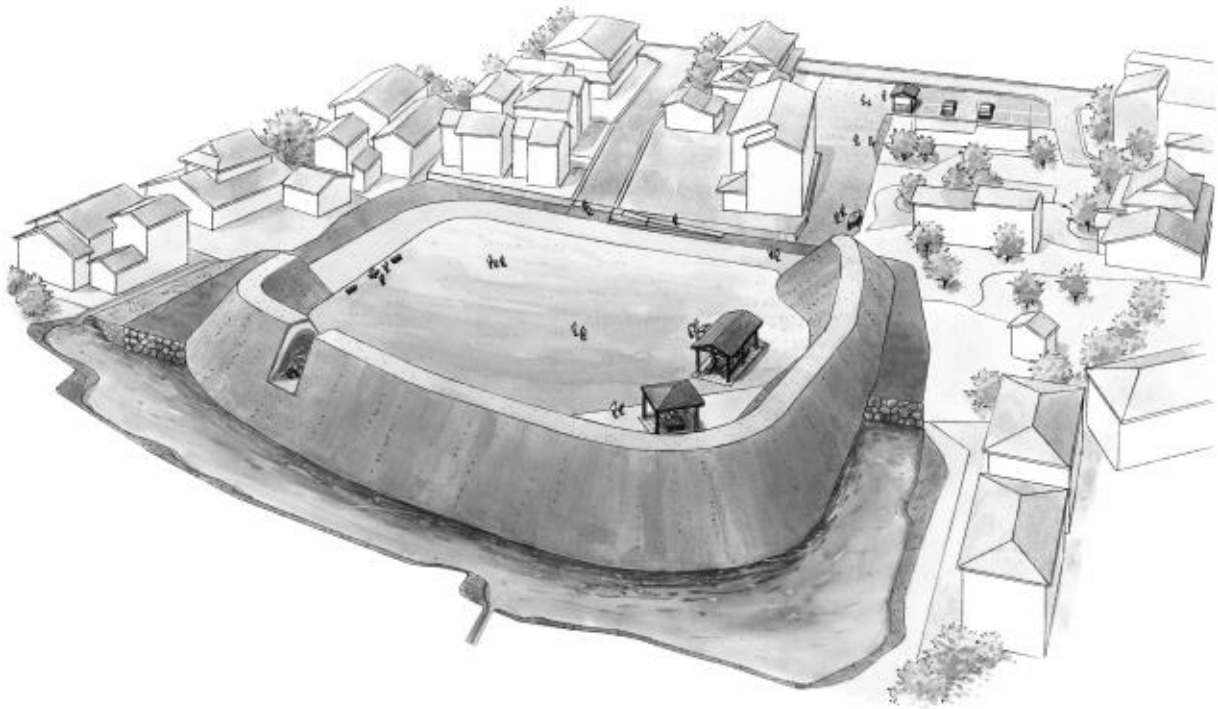
4 物集女城跡と地籍調査

物集女城跡に関する埋蔵文化財発掘調査成果の考察は、昭和 56（1981）年に実施し測量図に加筆・修正をしたものが継続して使用されてきた。

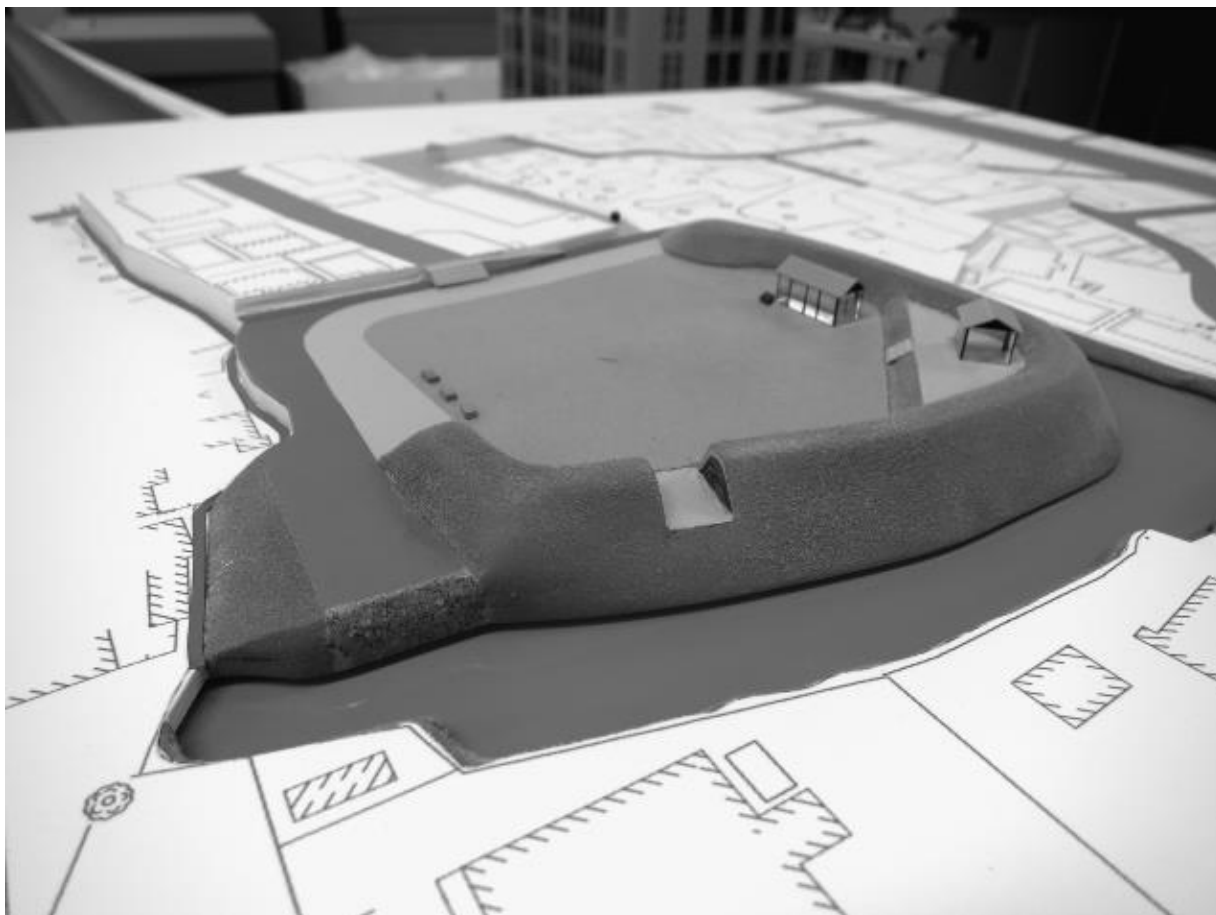
向日市教育委員会は、平成 30（2018）年度に今後の物集女城跡の保存と活用を視野に入れ、土地に関するさまざまな測量・調査の成果について、その精度・正確さが国土調査と同等以上となるよう国土交通省から国土調査法第 19 条第 5 項の指定を受けるとともに補助金を得て周辺の測量調査を実施した。

本事業により物集女城跡をより正確に測量し、地番 1 筆ごと境界を確定し、地積更正（1 筆ごとの正確な面積測量）を行うことができた。

これらの成果は、今後、物集女城跡の史跡指定など土地に関する保存に関する基礎資料となるもので



第 12 図 物集女城跡 保存整備計画（案）鳥瞰図〔平成 30（2018）年度作成〕



第13図 物集女城跡 保存整備計画（案）模型〔平成30（2018）年度作成〕

あり、有意義な成果を上げることができた。

また、同年には埋蔵文化財発掘調査成果に基づき、「物集女城跡復元整備鳥瞰図（案）」および「物集女城跡復元整備（案）模型」を作成し、保存と活用への気運を高めた。

このように、令和3（2021）年度までに物集女城跡跡に関する一定の基礎資料等を整えることができた。

このため、令和4（2022）年度、公益財団法人向日市埋蔵文化財センターに物集女城跡の適切な保存と整備、活用の促進の指針となり加えて史跡指定時の添付資料の役割をもつ「物集女城跡総合調査報告書」（本冊）の作成を委託した。



第 14 図 物集女城跡周辺地形現況平面図〔平成 30 (2018) 年度測量〕